HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ローマ字と日本の近代化 ： ヘボン式に至るローマ字研究の歴史(<特集>共同研究報告 ： 近代日本における文化・文明のイメージ)
著者	中川，かず子
引用	北海学園大学人文論集，10：135-166
発行日	1998-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

ローマ字と日本の近代化
── ヘボン式に至るローマ字研究の歴史

中　川　かず子

1　はじめに

ローマ字は漢字，仮名文字に次いで日本語の表記体系の中に組み込まれていて，日常生活の上でもごく身近な存在になっている。ワープロやパソコンの入力においても「ローマ字変換」を選ぶ人は多いだろうし，図書館における図書や雑誌の分類にもローマ字はよく活用される。また，海外旅行用のパスポートや出入国カードにもローマ字表記の必要性が高い。このほか，観光案内や施設使用案内のパンフレットなどに，地名，固有名詞，人名の読み方表示にローマ字が添えられることが多い。そして，何よりも，日本語会話を習得しようとする外国人の学習者にとって，ローマ字書きの単語や文は大いに理解の助けになる。特に，初級学習者に対する日本語教科書は，漢字や仮名に慣れるまでローマ字を併記するものが多い。しかし，読むのはいいが実際に書くとなると，長い音，詰まる音の表し方，何を基準にハイフンやスペースを入れるか，大文字と小文字の使い分けをどうするか，といった細かい表記法上の規則に惑わされることが多い。筆者自身の経験であるが，日本語教科書中の日本語文をすべてローマ字で表すよう指示された時，〝Nihongo〟なのか〝nihongo〟なのか，あるいは〝nihon-go〟が適当なのか自信がもてなかった。また，助詞のヲを〝o〟と表記するのか，〝wo〟（ワープロではこのようになる）を用いて〝okaasan〟の「お」と区別すべきか，長音は母音を重ねるのか，母音の上に長音の符号（ー）をつけるのがよいのか等々，ローマ字に慣れていないと難しく感じたものである。そこで，比較的最近の日本語教科書を開き，中のローマ字を見ると，

やはり少しずつ異なることを発見した――〝atchikotchi〟(あっちこっち――〝acchikocchi〟とも)，〝sam-pun〟(さんぷん――〝san-pun〟または〝sanpun〟とも)，〝reizõko〟(れいぞうこ――〝reezooko〟とも)等の単音レベルの表記を始め，ハイフンによる区切り方や分ち書きの方法に違いが見られた。

現在，一般に用いられているローマ字綴りは「ヘボン式」と呼ばれる方法であるが，これは，James Curtis Hepburn博士が幕末から明治にかけて編纂した和英辞書(『和英語林集成』)の中で生み出され，明治期の半ば以降は修正を余儀なくされたが，激しいローマ字国字論争の果てに落ち着いた表記法である。したがって，現在のヘボン式に至るまでもローマ字正字法は，明治，大正，昭和にわたって紆余曲折の道を辿ってきた。しかし，ヘボンに至るまでも，多くの先人達が日本語や日本文化をローマ字で表し日本語の扉を少しずつ開いてくれたことも見逃せない。16世紀末に九州に上陸したスペイン，ポルトガルの宣教師達による日本語とローマ字の研究，鎖国中も通商の可能だったオランダ関係者による資料蒐集，新井白石や大槻玄澤などの蘭学者達の西洋化思想，ヨーロッパの東洋学者達による日本研究，さらに開国後の欧米からの宣教師等による日英語教育の普及と日本語学書の刊行というように，長い近代化への歩みの中で外国人の日本研究者達の果たした役割は大きい。封建体制の社会を打破し日本人に開化思想をもたらしただけでなく，彼らは西洋人あるいは非漢字圏の人々に日本の古典文学や文法，語彙をわかりやすく伝えてくれた。ローマ字表記は発音を知るための必要な道具であった。

本稿では，こうした歴史的経緯を踏まえながら，近代化とともに発展し今日のヘボン式を生み出したローマ字の歴史を辿ってみたいと思う。資料は，キリシタン関連資料，オランダ語関連資料のほか，メドハースト，パジェス，ローニー，ディキンズ，新井白石，大槻玄澤(磐水)，ヘボン，ブラウン，サトウほか(明治初期まで)の辞書，翻訳書，語学書，著作集等の文献である。

2　キリシタンから西洋の東洋学者の文献に見るローマ字

2.1　キリシタンによるローマ字の普及

日本で初めてローマ字本として世に出たのは，1591 年，加津佐で出版されたキリシタン文献の一冊，『サントスの御作業の中抜書』（SANCTOS NO GOSAGVIO NO VCHI NVQIGAQI）である。また，翌年には『ドチリナ・キリシタン』（DOCTRINA），『口語訳平家物語』（FEIGE NO MONOGATARI, Amacusa, 1592）がともに天草で出版されている。その後，天草の『伊曽保物語』（ESOPONO FABVLAS, Amacusa, 1593），『羅葡日対訳辞典』（Dictionarivm Latino-Lvsitanicvm ac Iaponicvm, 1595），長崎版『ドチリナ・キリシタン』（1600），『日葡辞書』（1603），ロドリゲス編『日本文典』（1604～1608）等のローマ字書き文献が刊行されている。いずれも，当時の外国人宣教師の教育の目的で書かれたものであるが，書名の後にあるローマ字を見てわかるように，ハ行（f），カ行（c，q），母音のウ（v）等に特徴が見られる。しかし，ローマ字の表記も何度か改訂されたようで，1620 年に刊行されたロドリゲスの『日本小文典』ではまた違った部分も見られる。この点については，土井忠生の「ロ氏小文典のローマ字綴り」（昭和 19 年／1944）に詳述されている。土井氏によると，『小文典』の「我々の文字で日本語を写す綴字法について」の章で，日本語をローマ字で書写する場合の基本的な考えが次のように説明されているという ── 「拉丁語の綴字法が何れの国民にも共通しているので，全体としてはそれに拠った。拉丁語に欠けているものは，葡萄牙語が日本語と多数の類似した綴字を持っており，而もそれらは欧羅巴のある地方にはないものなので，それを採り，更に伊太利語，西班牙語を採った。そして我々の持たない日本人の特殊な二つの綴字［ツ（Tcu）とヅ（Dzu）を指す。Dzu はロドリゲス独自の綴りで，一般には Zzu が用いられた ── 土井氏注］を新しく作りだした。」　一方，大文典（1604 年～）では，ポルトガル語，ラテン語を基準にしたが，実際には両者の大部分が共通し，ポルトガル語に特有のものを採ったため，ポルトガル語綴りの特徴が強いという。『小文典』では，日

本語音の母音をa，i，v，ye，voの五音（ごいん）とし，いろは仮名の47文字を配列し直し，繰り返し文字を含めて50音のローマ字を次のように表している。

あ	い	う	ゑ	を	ま	み	む	め	も
A	Y	V	Ye	Vo	Ma	Mi	Mu	Me	Mo
か	き	く	け	こ	や	ゐ	ゆ	え	よ
Ca	Ki	Cu	Ke	Co（＊）	Ya	Y	Yu	Ye	Yo
さ	し	す	せ	そ	ら	り	る	れ	ろ
Sa	Xi	Su	Xe	So	Ra	Ri	Ru	Re	Ro
た	ち	つ	て	と	わ	い	う	ゑ	お
Ta	Chi	Tcu	Te	To	Va	Y	V	Ye	Vo
な	に	ぬ	ね	の					
Na	Ni	Nu	Ne	No					
は	ひ	ふ	へ	ほ					
Fa	Fi	Fu	Fe	Fo					

（＊注　1604年の『日本語文典』（大文典），1595年の『羅葡日辞典』では，カ（Ca），クア（Qua），キ（Qi），ク（Cu），ケ（Qe，Que），コ（Co），クオ（Quo）となっている。後者の復刻版から例を挙げておく――〝Cacayaqu〟（輝く），〝Qizzucai，vrei，nagueqi〟（気遣い，憂い，嘆き），〝Cudaqu〟（砕く），〝Cocuyeno fito〟（黒衣の人），〝Cocoro〟（心），〝Quanguen〟（還元），〝Qebucaqu vosoroxiqi mono〟（毛深く恐ろしきもの），〝Quoqinaru fito〟（高貴なる人）等。語頭と語尾でｃとｑを使い分けたものもある）

小文典のローマ字については，要点として次の通りである――「Chiya，Chiyu，Chiyoと綴ってCha，Chu，Choと発音する。同様に，Niya，Niyo，Niyu，Xiya，Xiyu，Xiyo，Fiyo，Kiyo，Riyo，Kefu，Kifuと綴って発音が，Nha，Nhu，Nho，Xa，Xu，Xo，Fio，Kio，Rio，Keo，Kiuになる。つまり，ローマ字綴りは仮名遣いに合わせ，話す時の発音が変わる。また，F（ハ行）がB（バ行）やP（パ行）の濁音，半濁音に変わり，Cha

（チャ）の濁音がGia（ヂャ），Gi（ヂ），Gio（ヂョ），Giu（ヂュ）と綴られる。同様に，Ca，Ki，Cu，Ke，CoはGa，Ghi，Gu，Ghe，Goとなり，TcuはDzuになるが，イタリア語のZuのような発音である。Xa，Xi，Xu，Xe，Xo（シャ，シ，シュ，セ，ショ）はIa，Ii，Iu，Ie，Io（ジャ，ジ，ジュ，ゼ，ジョ），keô（けふ），Quŏ（くわう），Kiŏ（きやう）はGheô，Guŏ，Ghiŏとなり，清濁音ともに流音に発音する。Bamu（ばむ）と書いてBanと読み，Batcu（ばつ）と書いてBatと読む。促音化の規則性について，Rocu＋quan → Rocquan（六貫），Iuu＋fai → Iippai（十杯），Ficu＋faru → Fipparu（引っ張る）のようになる。」

このように，ロドリゲスは『小文典』の中で日本語の音声を正確に，具体的にわかりやすくローマ字で表わしている。

（参考）右にあるのは，天草本『伊曽保物語』（1593年）の扉である。ローマ字は『小文典』のものと少し異なる。

（きょ—qio，きざむ—qizamu，サ行の綴り，助詞ハ，ヲ—ua，uoなど）

本文を見ると，助詞を前の名詞につけて書き表わしている ──

～cotoni suru/vareniua xujinga nai

（～ことに　する／われには　主人がない）

ESOPONO
FAB-VLAS.
Latinuo vaxite Nippon no cuchito nasu mono nari.
IEVS NO COMPANHIA NO
Collegio Amacusani voite Superiores no gomenqiotoxite coreuo fanni qizamu mono nari.
Goxuxxe yori M.D.L.XXXXIII.

（今泉忠義編翻刻版『天草本伊曽保物語』，昭34年，より）

2.2　ヨーロッパの日本研究者によるローマ字

1549年にイエズス会宣教師ザビエルが日本（鹿児島）に上陸以来，キリシタン宣教師による日本語学の研究書や指導書は，今日の日本語学ならびにローマ字表記法を含む日本語教育の発展の楚を築いた。しかし，その後のキリシタンへの弾圧と外国人への厳しい入国制限により，それ以上の研究の道は断たれてしまうのである。鎖国体制に入るとオランダ人以外の来日は許可されなかったため，その後幕末の開国まではオランダ関係者を中心に日本研究が引き継がれていくことになる。一方，海外では，特にオランダ，フランス，イギリスなどヨーロッパの日本語，東洋研究者等が19世紀に活躍し，日本語や日本文化を西洋人に広めていった。そのためにローマ字が大いに活用されたのである。

1800年代に入り，英国人メドハースト（W.H. Medhurst）によるローマ字，仮名書きの英和，和英語彙集（〝English and Japanese and Japanese and English Vocabulary〞, Batavia, 1830）が刊行された。Bataviaという南国の町で，しかも印刷事情の悪いところで辞書を編集，出版する苦労は察するに余りある。メドハースト自身，序文の中で〝— the work has been executed at a Lithographic press, by a self-taught artist, and in a warm climate, where the Lithography often fails; also the whole has been written by a Chinese, who understands neither English nor Japanese . . .〞と，印刷事情の悪いことのほか，すべて日本語も英語も知らない中国人が手で書いたものであることを述べている。さらに，メドハーストは日本へ一度も行ったことがなく，日本人と話したこともないが，日本で住んでいた人々から仮名と漢字で書かれた資料を入手できたので，中国語の知識が漢語の理解に役立った，とも書いてあり，中国語に堪能だったからこそ当時の日本語の資料が理解できたことがよくわかる。序文には，日本語のsyllableや音声についての説明があり，ローマ字で語句を表わす際の基準も詳しく，かなり正確に述べられており，譲り受けたとされる日本語の関連資料は質，量ともに十分だったと想像できる。

日本語音声とローマ字表記について，序文の説明と本文の例を交えなが

ら要点を次のようにまとめてみた（序文の説明と実際の表記に違いがある場合はその旨明記した）──

1）母音の無声化について ── ローマ字で tsi（チ），tsoo（ツ）は ts'となる。foo（フ），ki（キ），kfoo（ク），si（シ），soo（ス）は，それぞれ，f'，k'，kf'，s'，s' と綴る。

例：Yakf'-sokf'（約束）/Sakf'-zits'（昨日）/Mats'ge（まつげ）

2）類似した音声について ── 48 音のうち，i と wi，o と wo など似た音がいくつかある。wa（ハーワ），woo/foo（ウーフ），ii/fi（イーヒ）は両方の音がある。

例：Ni-woo ka-oo（乳香），Ya-si-naf'/Ya-si-na-oo（養う）など

3）ラ行音について ── 語頭ではどちらかというと［l］音に近い。

4）ハ行音について ── f か h の区別がつけ難いが，両方を含み，鼻に抜ける音。

例：Hats'（八）/Ha-dsi-ka-si-ki（恥かしき），Fa-tsi（鉢），Fi-to（人）

5）母音について ── a，i，oo，e，o（アイウエオ）と綴り，発音を英語の音で例示している（a-arm/i-machine/oo-too/e-grey/o-go）。ウの綴りが特徴的である。

例：Tsoo-re（連れ），Ka-mo oo-ri（加茂うり），Soo-i kf'wa（西瓜）など

6）促音，長音，拗音について ── ツに後続する音によって促音化が起こり，tets'-po-oo（鉄砲）が tep-po-oo に，mots'-to-mo（もっとも）が mot-to-mo と発音される。母音に（∧）をつけて長い音を示す（＊注　本文中にこの例はない。母音を重ねて表わしている）。拗音は ya，yioo，yo（yao）で表わす。

例：Yo-oo zin（用心），Soo-zoo-sikf'（騒々しく），S'ya hon（写本），Tsi ki-oo（地球），Boots'k'ya-oo（仏教）など

7）その他 ── 短縮形（contractions─話体では語尾の母音が落ちることが多いが，そのことを主に指しているようだ─筆者）

例：No-kor'（残る），O-mof'（思う）Ha-sam'（はさむ）など。音節の区切りにはハイフン（－）を用いる。

母音の無声化，音節の捉え方，ウの綴り，促音などに英語話者らしい工夫が見られる。

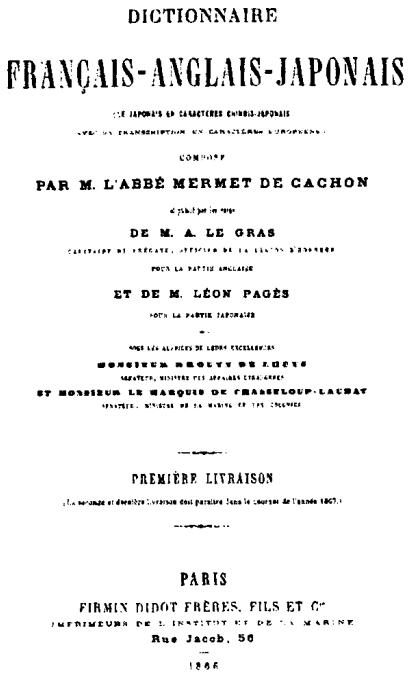
メドハーストの『英和・和英語彙集』が出版された1830年以後も，オランダ関係者による日本研究書が現われている。また，欧米，特にオランダ，フランス，イギリスにおいて，日本語文法書等が刊行され，ヨーロッパにおける日本研究の黎明期を象徴するように，ホフマン，クルチウス，パジェス，ローニー，ディキンズ，サマーズといった東洋学者達の名著がこの時期に多く残されている。この中のホフマン(J.J. Hoffmann)，パジェス(L. Pages)，ローニー（L.D. Rosny)，ディキンズ（F.V. Dickins）の著作の中から，ローマ字綴りの特徴を見ていく。

右のローマ字綴りは，ホフマンの代表的な著〝Japansche Spraakleer″（『日本文典』／1867年，ライデン）の中で使われたものである。ホフマンの業績全般については，杉本つとむの『西洋人の日本語発見』(1996年)に詳述されているので，ここではローマ字表記に関することのみ触れたい。

ホフマン『日本文典』(1867年）より

ホフマンのローマ字は上述の著とそれより10年前に出版された〝Proeve eener Japansche Spraakkunst, van D. Curtius, Leyden, 1857″（クルチウスの日本語学抄）とは異なる綴りが見られる。1857年の著では，母音のウがオランダ系のoeになっていること，ハ行はfa，fi，fu，fe，foで，チ（tsi)，ヂ（dsi)，ジ（zi）が主に使われた。それに対し，1867年の著になると，ウをuに換え，チ，ヂ（ツ，ヅ)，ジ（ズ)，ハ行のような特徴的な音は2～3種の綴りを示している。(右上図を参照)

次に，フランスの日本研究家，パジェスとローニーの辞書と著作集からローマ字表記を調べてみた。パジェスは日本耶蘇会による『日葡辞書』(1603年初版）の仏語訳である『日仏辞典』(Dictionnaire Japonais-Français, Paris, 1868) の著者として知られている。日仏辞典の編纂の過程で 1866 年には『仏―英―日辞典』(Dictionnaire Français-Anglais-Japonais, Paris, 1866) も出版しており，パジェス独自のローマ字綴りも工夫されている。ただ，この辞書は実用性を重んじているせいか，日常の語彙表現の蒐集に重点が置かれ，文法や音声についてはあまり関心がもたれていないように感じられる。ローマ字と漢字仮名を併記してあるが，ローマ字の規則性について記してあるわけではないのでその全体像は正確につかめないが，本文の用例の中からローマ字綴りの特徴をいくつか探り出したいと思う。以下，項目を分けて整理したものである ──


DICTIONNAIRE

FRANÇAIS-ANGLAIS-JAPONAIS

PAR M. L'ABBÉ MERMET DE CACHON

DE M. A. LE GRAS

ET DE M. LÉON PAGÈS

PREMIÈRE LIVRAISON

PARIS

FIRMIN DIDOT FRÈRES, FILS ET Cie

Rue Jacob, 56

1866

SYLLABAIRE

イ	i	ワ	wa	井	wi	サ	sa
ロ	ro	カ	ca	ノ	no	キ	ki
ハ	ha	ヨ	io, yo	オ	o	ユ	you
ニ	ni	タ	ta	ク	cou	メ	me
ホ	ho	レ	re	ヤ	ia, ya	ミ	mi
ヘ	he	ソ	so	マ	ma	シ	si
ト	to	ツ	tsou	ケ	ke	エ	e
チ	tsi	ネ	ne	フ	fou	ヒ	hi
リ	ri	ナ	na	コ	co	モ	mo
ヌ	nou	ラ	ra	エ	ie, ye	セ	se
ル	rou	ム	mou	テ	te	ス	sou
ヲ	o	ウ	ou	ア	a	ン	n

パジェス『仏・英・日辞典』(1866) より

1）母音について ── ア (a)，イ (i, yi)，ウ (ou)，エ (e, ye)，オ，ヲ (o, vo, wo) の綴りが使われている。

例：Genrio narou hito（善良なる人），Soumi（炭），Iytarou（言いたる），Yezzou（絵図），Votto（夫）

2）カ行音――カ（ca），キ（ki），ク（cou），ケ（ke），コ（co）となり，キ，ケに「k」を充てている点で，ロドリゲスの『小文典』と同じである。

例：Courouma（車），Cawarou（代わる），Saichiki sourou（彩色する），Wakarou coto（わかること）

3）シ，セ，チ，ツの発音――それぞれchi，che，tki，tsouと綴られている。シ，セに父音字chを使っているのはフランス語の影響かと思われるが，チ（tki）の綴りについてはよくわからない。ただ，ほんの何か所かに〝tchi〟という綴りも見られ，揺れがあるようである。因みに，同じフランス人のローニーは『日本詩歌集』（1871）の中で「チ」を〝tsi〟としている。シ，セ，チ，ツの例として次の通り――Tanochimou（楽しむ），Macacherou（任せる），Wacatki（分かち），Betsou（別），Tchicazzouki（近づき），Catatki（形）など

4）特殊音について――拗音ヤ，ユ，ヨはya（ia），you（iou），yo（io）と表わされ，長音はイー（iy）を除き，符号の（ˆ）か（ˋ）をつけて表わしている。しかし，あまり規則性は見られない。また，促音や母音の無声化の起こるところには（'）をつけて示している。

例：Iò-bò（容貌），Dògou（道具），Hô-yòu（朋友），Bio-in（病院），icha（医者），Tenchiou（天主），Baikiacou（売客），Iytarou（言いたる），ts'tome（勤め），M'ma（馬），Outò（歌フ），ouchinò（失フ）

5）その他――ハ行はh，fの両音を用いている。上の例にあるが，セをシェ（che），ゼをジェ（je）で表わしているのも，原本で蒐集した方言の影響があると思われる。ガ行のうち，ギ，ゲのみghi，gheとやや変則的な綴りになっている。ザ行はジ（ji）を除いてzを用い，ヂはdgi，ヅはdzouまたはzzouとしている。

例：Hana（花），Hibiki（響き），Houro（風呂），Foufou（夫婦），Chentacou（洗濯），Moughi-zake（麦酒），Ghenzourou（減ずる），Goumba（軍場），Jihi（慈悲），Dgimen（地面），Tsouzzouki

（続き），Dzoukin（頭巾）など

パジェスのローマ字には，ロドリゲスの『小文典』にあるラテン語，ポルトガル語系発音綴りの影響が大いに見られるが（特に，母音，半母音，カ行，ガ行），ハ行にh音を加えたり，ウをouで表わすなど，フランス語や英語の音の影響も感じられる。なお，助詞との関連で言うと，「ヲ」についてはほとんどすべてハイフン（－）で分けて書かれ，ガ，ノ，ニについては名詞に付いている。例は次の通り ── Nori-o tsoukerou（糊を付ける），Ranga ocorou（乱が起こる），Hitono na-o souterou（人の名を捨てる），Meihacouni sourou（明白にする），その他，Teni-o ha-o ts'kerou（テニヲハを付ける）という例文もある。

ローニー（L.D. Rosny）は，中国語研究から日本語学，日本研究へと進んだ学者として知られ，言語，翻訳（文学，文化）の分野を中心に数多くの著作を残している。その中で，日本の伝統的な詩歌をローマ字，仮名で紹介しフランス語による解釈を加えた代表的な著作『日本詩歌集』（Anthologie Japonaise, 1871）をここで取り上げ，ローニーの用いたローマ字綴りの具体的な内容を見ていくことにする。その中でも「百人一首」（Hyakou-Nin-Is-syou）を取り上げ，同じ頃（1866年）にロンドンで出版された英国人ディキンズ（F.V. Dickins）の『日本の詩歌―百人一首』（Japanese Odes-"Hyak Nin Is' shiu", London, 1866）との比較考察を試みたい。

i	伊	ku	久
ha	波	ya	也 夜 Voy. yo.
ni	爾 二	ma	麻 萬
to	騰	ke	家
ru	流	fu	布 敷 不
wo	乎	ko	其
wa	和	a	安
ka	我	sa	左 佐
yo	夜 餘	ki	伎
so	曾 賊	yu	由
tsu	津 都	me	米
na	念	si	之 知 四 思 旨
ra	良		師
mu (n)	牟 武	fi	比 備
no	乃 能	mo	毛 文

まず，ローニーは序文で万葉仮名とローマ字の一覧表を挙げている。（右の表）これを見ると，それまでの綴りとの違いが感じられる。例えば，ハ行のフ（fu）とヒ（ふ）というよう

な発音に即した綴り方，シをchiでなくsiとした点などに，同じフランス人のパジェスと違う特徴を見せている。しかし，歌詞のローマ字化となると，固有名詞の書き出し，語句の切りつなぎ方等，意味の識別に関わるさまざまな要素が加わってくる。ローマ字文の書き表わし方も含めて，ローニーのローマ字綴りの特徴を見ていきたい。

1）固有名詞（歌集，人名，職位など）について――固有名詞はすべて大文字から書き始め，漢語であれば漢字音を音節の区切りとし，それをハイフンでつないでいる。

例：Kama-kura（鎌倉），Kadzi-vara Kage-toki（梶原景時），Sin-tsyokŭ-sen-siû（新勅撰集），U-dai-zin（右大臣）など。

2）文の書き方――日本文の場合，助詞を他の品詞と同様に文の独立した要素として位置付けるかどうかによって表わし方が違ってくる。第一頁の勅撰集からの和歌が次のように綴られている――"Yo-no naka-va tsŭne-ni gamo-na nagisa kogu Ama-no o bune-no tsuna de kanashi mo."（「よの　なかハ　つねに　がもな　なぎさ　こぐ　あまの　を　ぶねの　つなで　かなし　も」―本文の分かち書きのまま）ローマ字文の特徴として，後半の句の書き出しを大文字でしていること，歌を詠むときのポーズ（間）にスペースを入れたり，区切りのない連続の語にはハイフンを入れているところである。つまり，助詞の多く（ハ，ガ，ニ，ノ，ヲなど）が前の名詞とハイフンでつながれて

①母音――a，i，u，(ou)，e(ye)，o　ウについてはou，uの両方見られる。例：Shôgun(将軍)，Toki-masa(時政)，Yori-iye(頼家)，Oho-ye-no Tsi-sato（大江千里）
②キ，ギ，ケ，ゲ，クオ――カ行，ガ行はすべて例外なくk，gで表記されている　ka，ki，ku，ke，ko/ga，gi，gu，ge，goその他，kwo

も使われている。例：～naki（なき），Konin-siû（古今集），nagisa（渚），Kage-toki（景時），Kwô-ka-mon-in（皇嘉門院），Kwô-ko Ten-ô（光孝天皇）など
③シ，チ，ツ ── si，tsi，tsŭ　例：sika（鹿），nusi（主），mitsi（道），Itsi-deô（一条），tsŭki（月），amatsŭ（あまつ）
④ジ，ゼ，ヂ，ヅ ──ʒi，ʒe，dʒi，dʒu　例：miʒikaki（短き），kaʒe（風），Dai-ʒin（大臣），fudʒi（藤），Ten-dʒi（天智），Idʒŭmi- Sikibu（和泉式部）
⑤ハ行音 ── ha，ɦi，fu，he，ho　ヒ，フ以外は h の表記（[ɦ] は有声の[h]）　例：ɦito（人），haru（春），mihenu（見へぬ），fudzi（藤），Ho-deo（北条），omô（思ふ），omovazari keri（思ハざりけり），～va（～ハ）
⑥拗音（シャ，チャ，ヂャ，ジャ）── sya，syu（siu），sho/tsya，tsyu，tsyo/ʒya，ʒyu，ʒyo/dʒya，dʒyu，dʒyo　例：syô-gun（将軍），Go-syu-i-siû（後拾遺集），Sin-tsyoku-sen-siû（新勅撰集），Shu-ʒyaku-Ten-ô（朱雀天皇），So-dʒyô Hen-dzyô（僧正遍昭）
⑦その他 ── 母音の無声化は母音の上に符号（∨）がつき，長音は（∧）がついている。促音はハイフンを用いて子音を重ねている。母音の連続の場合，（'）で後続の母音を区切り，i の後に y が来る時は i を外している。例：tsŭki（月）Hyakou-nin-is-syou，ses-syô（摂政），bet-tô（別当），omo'i（思い），i'u（言う），Myako（都），kayo'i（通い）

いる。(yo-no, naka-va, tsune-ni, o bune-no, haru-wo, . . .)

3）音の綴り方 ── ローニーのローマ字綴りは上でも述べたが，いくつかの点で新しい試みが感じられる。どちらかというと，現在のヘボン式ローマ字に近くなった点が多く見られる。その新しい特徴的な綴りを次のようにまとめてみた ──

パジェスとローニーに共通するのは，日本語の発音に忠実な表記法を工夫しているところである。ローマ字を見ているだけで，日本語音声の特徴を学ぶことができるほどである。シ，チ，ツ，ヒ，ジ，ヂ，ズ，ヅといった発音しにくい音のほか，母音の長短，流音化，無声化という日本語の特徴を捉えている。母音の無声化を厳格に綴ったのがメドハーストであるが，それ以外の音声上の特徴はロドリゲス等によって既に指摘されている。ロドリゲスの翻訳を通して日仏辞書を編纂したパジェスは，日常生活の語彙と発音を結びつけ，ローニーは解釈の難解な古典文学をより普遍的な文法と音声の規則に照らし合わせることによって，それぞれのローマ字表記を実現させている。このフランス人の研究者によるローマ字を比べると，チ，ツ，ジ，ヂ，ヅを除いて，ローニーの方がやや単純化しているようである。カ行はすべてkで，サ行はsを用いている。ウについても初期の作品（例えば〝Textes Japonais, Paris, 1863″など）では〝ou″だけだったのが，しだいに〝u″を使うようになった。また，拗音もya，yu (yiu)，yoとわかりやすい。

次にディキンズの「百人一首」(Hyak Nin Is'-shiu) に移りたい。彼の著書は，1866年にロンドンのSmith Elder社から出版されたイギリスで初めての日本文化翻訳書と言われる。ローニーも，同書の内容を参考にしていることが彼の『日本詩歌集』(1871) の序文に書いてある。しかし，ローマ字表記については，それほど多くの類似性があるわけでない。ディキンズのローマ字はヘボン（J.C. Hepburn）の『和英語林集成』の初版（1867年）が出る前に現われたのであるが，チ，ツ，ジ，ズ (chi, tsu, ji, zu) を始め多くの音に現在のヘボン式ローマ字綴りと共通するものがある。全

RECUEIL

DE

TEXTES JAPONAIS

A L'USAGE

DES PERSONNES QUI SUIVENT LE COURS DE JAPONAIS

PROFESSÉ A L'ÉCOLE SPÉCIALE DES LANGUES ORIENTALES

PAR M. LÉON DE ROSNY

PARIS

MAISONNEUVE ET Cie, LIBRAIRES-ÉDITEURS

POUR LES LANGUES ÉTRANGÈRES, ORIENTALES ET COMPARÉES

15, QUAI VOLTAIRE. — A LA TOUR DE BABEL

1863

ローニー『日本文集』(1863) より

体的な特徴としては，ディキンズもまた，日本語の発音にできるだけ則した表記を試みていることである。もっとも印象的なのは，母音の無声化を明示するために，"Hyak Nin"（百人），"Mei-gets-ki"（明月記）のように母音を始めから排している点である。本文中，こうした表記があちこちに見られる。また，巻末にローマ字書きの和歌を載せているが，文を綴る時の規則性にも注目される。以下，個々の要素をいくつか取り上げて特徴を整理してみようと思う。文については，ローニーの綴り方と比較をしている。

1）母音の有無の明示 ── 上述したように，著者は語末や語中に現われる母音の無声化を正確に表わすよう努めている。次の例からも母音の

有無が一目瞭然である――例：H'tomaro（人麻呂），Kakehash（懸橋），Ids'mi Sh'kibu（和泉式部）なお，母音の長短については区別が明確でない。例：Ten-wo（天皇），Dai-sho（大将）

2）カ行音――カ行にはすべてkを，古典仮名遣いのクワ，クオはkwa，kwoとなっている。

例：Ko-kin-shiu（古今集），Bun-kwa（文化），K'wanbaku（関白），Kwo ka mon（皇嘉門），Kwo tai go（皇太后）

3）シ，ジ，ズ――現在の「ヘボン式」ローマ字と全く同じである。

例：Sa dai jin（左大臣），Jiu-i-shiu（拾遺集），Sen-zai-shiu（千載集）

4）チ，ツ，ヂ，ヅ――チ，ツは現在のヘボン式と同じchi，tsuであるが，ヂ，ヅはdsi，dsuという特徴的な綴りとなっている。

例：Ohkeids'（大系図），Ids'mi

5）拗音――ヤ，ユ，ヨはそれぞれya（ia），yu（iu），yo（io）という二通りずつの綴りがある。シ，ジ，チの拗音もまた，現在のヘボン式と同じsh-，j-，ch-の父音字で表わされる。ヂの拗音については本文中から見つけられなかった。

例：Taiu（太夫）Jiu-i-shiu，Jyuntoku In（順徳院），Sei-sho-nagon（清少納言），biobu（屏風），Chok'sen shiu（勅撰集）

6）その他――後書きに日本語の発音についての記述がある。特に，鼻濁音，ハ行音，語尾の「ン」等について，ドイツ語やスペイン語の例を交えて説明している。

母音の無声化表記を始め，促音についてもses'sho(摂政)，nik'ki(日記)のように符号（'）で発音に近い綴りを工夫するなど，全体的に日本語の発音を重視したローマ字綴りになっている。しかし，その中で仮名遣いに配慮したk'wanbaku，Ohske（大介，おほすけ），Af'（あふ），Yahezak'ra(八重桜)のような綴りも交えている。文については，ハイフンをあまり使わずに独立した語を離したり，固有名詞の書き出しは大文字にするなどの

特徴がある。ここで，参考までに，同じ和歌をディキンズとローニーはどう書き表わしているのか，それぞれの綴り方を見てみよう ──

A. (Dickins) "Amatsu kaze kumo no kayoiji fuki-tojiyo Otome no sugata shibashi todomen."

(Rosny) "Ama-tsu kaze kumo-no kayo'idzi fuki to dziyo, Otome-no sugata sibasi todomem."

B. (Dickins) "Ts'ki mireba chiji ni mono koso kanashkere,wagami h'tots' no aki ni wa aranedo."

(Rosny) "Tsuki mireba tsi-dzi-ni mo-no koso kanasi kere! Wa-ga mi ʃitotsu-no aki-ni-va arane-do."

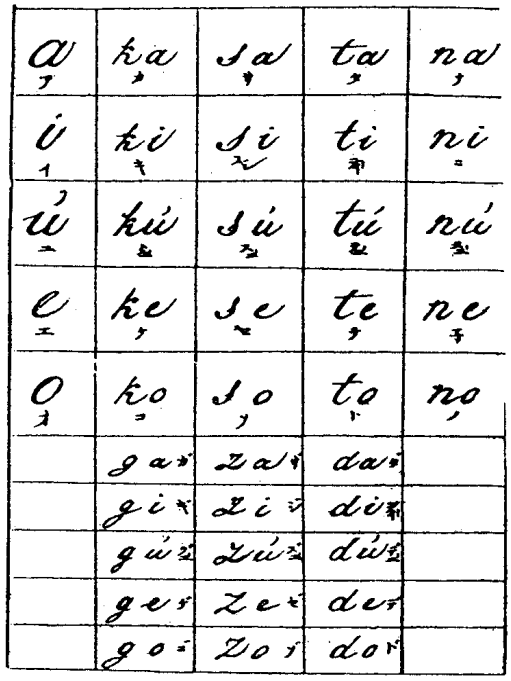
両者を比べると，語の切りつなぎ方にいくつか違いが見られる。ディキンズは，複合動詞の fuki-tojiyo（→ fuku＋tojiru）をハイフンでつないでいる以外は名詞，助詞，活用語（語尾まで）を一語としてそれぞれ独立して綴っている。それに対して，ローニーは，〝wa-ga mi〟とか〝tsi-ji-ni〟のように，音のつながりにハイフンを用いているように思える。文の意味を識別するにはディケンズの方がわかりやすいだろうが，歌を詠むためのローマ字文だとすればローニーの工夫が生きてくる。

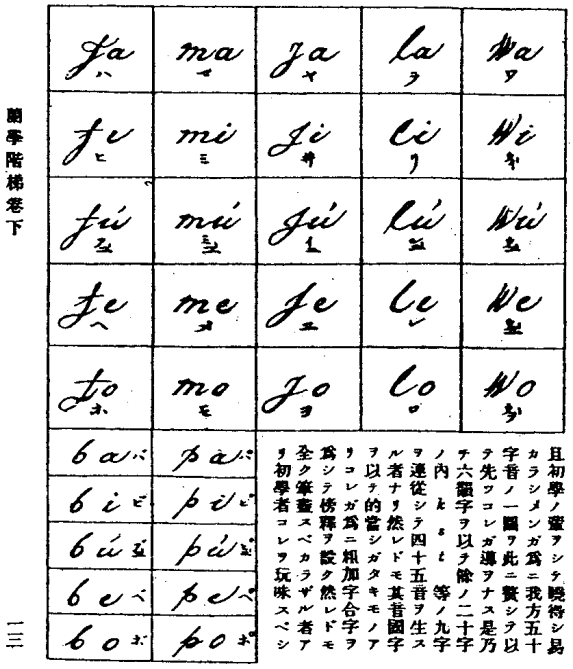
3　ローマ字と日本の近代化

3.1　蘭学者達によるローマ字の研究

これまで述べてきたように，日本語研究並びにローマ字の実践は，日本に滞在した外国人らの貢献により 16～17 世紀に大きな進歩を遂げた。その後，18～19 世紀半ばの鎖国体制下では，キリスト教宣教師に代わり，唯一入国の許可されたオランダ国の関係者，特に船長，医者，外交官，学者達を中心に日本とヨーロッパの事情が互いに交わされた。前節で紹介した外国人研究者達も，日本へ行かずとも中国やヨーロッパ経由で日本についての情報や研究資料が入手できたものと考えられている。一方，国内では，18 世紀に蘭学を通して医学や西洋事情を紹介した日本人蘭学者達の存在

が大きい。彼らは西洋の文字や言語の優れた点も紹介し，ローマ字推進者としての役割を果たした。新井白石は，薩摩に渡来したイタリアの宣教師，ジュアン・シドチ（ヨワン・シロウテ／Juan Sidotti）を江戸で取り調べる巡り合わせで，シドチから聴取した内容をまとめた『西洋紀聞』(1715)により，西洋の歴史，宗教，地理等の事情を紹介した。『西洋紀聞』中巻の中に，「……又諸国用いる所の書体二ツあり。一ツにラテンの字，二ツにイタリアの字，其ラテンは漢に楷書の体あるがごとく，イタリアの字は漢に草書の体あるに似たり，其字母，僅に20余字。一切の音を貫けり。文省き義広くして，其妙天下に遺音なし……（後略）」（上掲書，45頁，東洋文庫，平凡社，昭和43年）という西洋の文字についての記述があり，ローマ字（イタリアの字）がいかに簡便で優れているかを説いた印象を与えている。その後，青木昆陽が蘭語学習の成果を『和蘭文字略考』(1746年)ほか語学書にまとめ，蘭語の文字や文法を日本語との翻訳により紹介した。さらに，杉田玄白に師事し蘭学を修めた大槻玄澤は1788年に『蘭学階梯』を出版し，その下巻の中で文字の綴り方，語釈等について論じている。右の図に注釈があるが，それによると，「ローマ字26字





蘭学階梯巻下

『磐水存響』13頁「蘭学階梯」より
（大槻茂雄著，大正元年）

のうち，6韻字を除く20音」で日本語の50音を表わしている。つまり，c，r，h，q，x，vの文字を用いずに50音ローマ字を綴っている。注釈にもあるように，ローマ字で日本の国字を的確に表わすのは難しい場合もあり，近似した文字を合わせたとしている。ハ行が「fa，fi，fu，fe，fo」，ラ行が「la，li，lu，le，lo」となる以外は，「日本的綴り」に近いことや，全体に見て国字を基礎に洋字を合わせていること，さらに当時のローマ字綴りに用いられたc，q，v，hや「ウ」を表わすoeといったオランダ式綴りを排していることから，大槻玄澤の立場があくまで日本語の仮名の体系を基本に考えていたことがわかる。

3.2　幕末期の外国人宣教師とローマ字

現在のローマ字表記と言えば，誰もがヘボン式という名称を知っている。しかし，ヘボン（James Curtis Hepburn）という人が日本の文明開化に向けてどれほど人々に文化的啓蒙を施したか，ということはもっと大切な歴史的事実かもしれない。かつて日本語の文法書や辞書を著した外国人と同じく，ヘボンもまた宣教師であった。医師でもあり高い教養を身につけた，使命感に燃える宣教師だったからこそ，日本人への教育や医療を行いながら，聖書の翻訳や和英語辞書の編纂もやり遂げられたのであろう。異文化や異言語との交流や対照研究が可能になって初めて，自国の文化，歴史，言語等が客観的に捉えられるようになる。鎖国体制下の幕末にあっても，日本行きを希望し，そこに住む日本人や他国の人々に生涯をかけようとした外国人宣教師達は，日本の近代化への道を切り開き，育んだまさに開拓者であった。その中でも，ヘボンは幕末から明治の終わりまでを生き抜き，そのうちの約半生を日本で過ごし，日本の近代化のために生涯を尽くした。日本の近代化をローマ字史で見るとき，J.C.ヘボン博士がその中心に現われて然るべきであろう。

3.3　ヘボンの『和英語林集成』とローマ字

ヘボンについては多くの著作があり，また『和英語林集成』に関してだ

けでも，初版から三版（1867，1871，1886年）までの収録語彙，文法，表記等を比較調査した研究成果がいくつか発表されている。さらに，ローマ字部分のみに限っても，断片的ではあるが多くの研究者が論文の中で触れているので，ここで再度繰り返すつもりはない。ただ，本稿では先行研究を参考にしながら，ヘボンの試みたローマ字表記とその意義について筆者自身の考察を加えることにする。

現在のヘボン式綴りが確立されたのは，明治19年(1886年)の第三版からで，その前年に設立された「羅馬字会」との協議の上にヘボン式ローマ字が完成されたようである。第三版の序文(introduction)に，〝... Though somewhat against his own judgement, but with an earnest desire to further the cause of the Romajikai, he has altered to some extent the method of transliteration ...〟とあるように，ヘボン自身も羅馬字会の強い要望にある程度妥協せざるを得ない結果となり，これまでの表記を変えたものと見られる。したがって，初版，再版で用いられたローマ字がヘボンの考案したオリジナルということになる。しかし，ヘボンのオリジナルと言っても，ローマ字誕生の背景に，過去に出版された辞書や協力者の存在があったことは言うまでもない。初版の序文に，参考にした辞書について，〝... the small vocabulary of Dr. Medhurst published in Batavia in 1830; and the Japanese and Portuguese Dictionary published by the Jesuit missionaries in 1603.〟とあり，英人メドハーストの『日英語彙集』(1830）と耶蘇会の『日葡辞書』(1603）を参考にしたことが記されている。しかし，ローマ字表記について言えば，ヘボンの初版本にある，ウ（u)，ヂ（ji)，ハ・ヘ・ホ（h）は，現在のヘボン式綴りと同じだが，参考にしたとされる上記の両辞書とは全く異なる綴りを採っており，ヘボンの工夫が見られる。(参考：耶蘇会では，ウ（v)，ヂ（gi)，ハ・ヘ・ホ（f）を，メドハースト編では，ウ（oo)，ヂ（dsi)，ハ・ヘ・ホ（ｆまたはｈ）を用いている)また，ヘボンは，ジ，ヂにはjiを，ズ，ヅにはdzをそれぞれ充てているが，それまでの表記ではジ，ズがｚで，ヂ，ヅがｄを含むdz(又はds）とに区別される傾向があったことを考えると，これらもヘボンローマ

初　版	再　版	三　版
Ā	Aa	Aa
Dz	Dzu	Zu
H'to	Hito	Hito
H'yo-Ban	Hiyō-Ban	Hyō-Ban
Ī-Furashi	Ii-Furasu	Iifurasu
K'wa-Bin	Kuwa-Bin	Kabin
Sz	Su	Su
tsz	tsu	tsu
Wiye	Uye	Ue

二　版	三　版	二　版	三　版
hayeru	haeru	matsu-sugu	massugu
miyeru	mieru	tetsu pō	teppō
iye	ie	matsu-taku	mattaku
yuye	yue	baku-ka	bakka
kiyo	kyo	bikuko	bikko
kiu	kyu	koku-ka	kokka
kuwa	kwa		
kuwai	kwai		
batsu-kun	bakkun		

『近代文学研究叢書 12』（昭和女子大，1959）より

AN

ENGLISH AND JAPANESE

AND

Japanese and English

VOCABULARY.

COMPILED FROM NATIVE WORKS,

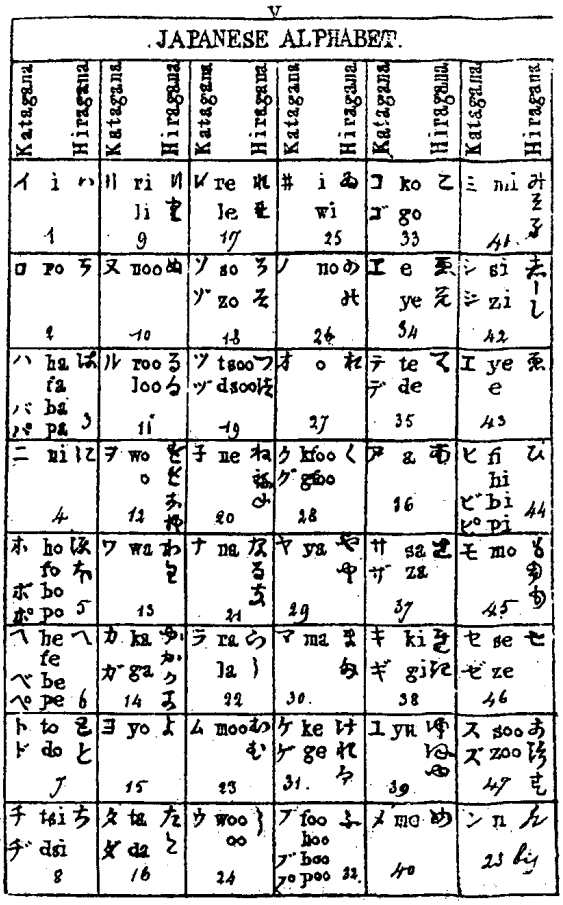
BY

W. H. Medhurst.

BATAVIA:

Printed by Lithography.

1830.



W. H. Medhurst『日英語彙集』（1830，Batavia）より

字の特徴として挙げられよう。その他，初版本ローマ字表記で特徴的な点は，ス (sz)，ツ (tsz)，拗音 (H'yo-ban)，母音無声化 (～sh'ta/h'to)，促音 (tets'po)，クア (Kwabin/Hosenkwa) などがある。長音，ヲ (wo) の表記は初版から三版まで変わっていない。なお，『近代文学研究叢書　12』(1959，昭和女子大) 所収の論文「ヘボン」に，初版から三版までのローマ字綴りが前頁の上の表のように整理されている。

初版のローマ字で特に興味深いのは，メドハースト同様，拗音や母音の無声化の表記に苦心の跡が窺われることである。つまり，Hyo（ヒョウ）でなく H'yo（ヒヨウ）と記すのは英語系話者の音声感覚からであろう。彼らの耳には［çjo］も［çijo］も同じように聞こえたり，逆に発音する場合もイを入れて「ヒイヨ」となる傾向がある。母音の無声化についても，メドハーストが〝Menk'yo″（免許）とか〝Yoo-roo-s'″（許す）という綴りを充てているように，ヘボンもこれに倣ったのか，〝～desh'ta″ とか〝～de-kimas″ といった表記を用いている。また，〝tets'po″ と綴って〝teppo″ と読ませるところも，メドハーストの方針を受け継いでいるようだ。

ところで，ヘボンの友人で辞書編纂の協力者とされる，アメリカ人宣教師，S.R.ブラウン (Samuel Robbins Brown, 1810～1880) は，日本滞在中に著した日本語会話書や聖書訳の中でローマ字を使っているが，ヘボンのローマ字に共通する部分が多い反面，独特の綴りも見られ興味深いものがある。『和英語林集成』刊行に先立ち，1863年に出版された〝Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese.″（口語日本語会話）には，ブラウンの工夫したローマ字文が見られる。その中からいくつか例を挙げると（片仮名書きは省略）――

1）〝Hi-za o-ri ni mu-sz-bu to to-ke ya-sz-u　go za-ri-ma-s'.″
(A bow-knot is easy to untie.)

2）〝I -chi do-ra nga ji-o-o　ne-da-n　de go za-ri-ma-s'.″
(A dollar is the fixed price.)

3）〝Ho-ka no fu-ne nga tsz-i-ta.″

(Another vessel has arrived.)

4）〝── wa do-o-za-n to mo-o-shi-ma-s'.〟

(── is called 〝doozan〟, a copper-mine.)

これらは会話書の冒頭部分であるが，シ（shi），ス（sz），チ（chi），ジ（ji），ツ（tsz）の綴りがヘボン辞書初版に現われたものと全く同じであるほか，無声子音の前後の発音されない母音（i, u など）を排した表記（～ma-s'/～de-sh'ta）も一致している。特徴的なのは，鼻濁音の nga，母音を重ねて表わす長音（do-o-za-n/mo-o-shi-ma-s'）等である。又，文全体の特徴として，語単位に分ち書きをしていること，音節（一文字）毎にハイフンでつなぐ書き方をしている点などが挙げられる。一音ずつつなぐ方法はローニーとも共通しているが，ブラウンもまた滑らかな話し方を求めてこのような表記の工夫を行なったのであろうか。

3.4　外国人による日英語会話教本とローマ字

ヘボンの『和英語林集成』初版は大きな反響を呼び，1871 年（明治 3 年）には再版が出された。明治維新後は海外でも評判になり，1873 年（明治 3 年）にはロンドンの Trübner & Co. で，翌年にはニューヨークの A.F. Randolph & Co. からも縮刷版が出ている。明治 3 年以降，国内では英語学習書が次々と刊行され，事実上英学史の幕開けとなった。日本人に対する英語学習書を始め，『横文字独学』，『英学階梯』，『英独横文字早学』といった西洋の文字（アルファベット）を紹介する教本の出版が続いた。また，外国人による日本語，英語会話教本も現われ，外国人の目から捉えた日本語の話し言葉の特徴が生き生きと描かれた。会話教本は，ローマ字と仮名で表記され，外国人には発音の正確さを伝え，日本人には西洋文字に親しませる意味でローマ字の役割は大きかったと言える。何冊か出版された外国人による語学教本の中で，内容とローマ字表記の点で興味深いと思われたのは，前述した S.R. ブラウン著の〝Prendergast's Mastery System, adapted to the studyof Japanese or English.〟という翻訳法を基礎とした

会話書で，トーマス・プレンダーガスト（Thomas Prendergast）のマスタリーメソッド（＊）を日本語，英語の教授に応用したものである。刊行は明治16年で，すでにブラウンは世にいないが，実際の執筆は明治初期の横浜アカデミー時代（英語教師であった）であろうと思われる。（＊注　外国語教授法の一種で，文法訳読法と直接法の折衷的な特徴をもつ。ヨーロッパを中心に1860年〜1870年にかけて多くの言語教授法に応用された）この教本で用いられているローマ字綴りは，以前の『口語日本語会話』のそれと比べて，ハイフンや符号（'など）がとれてより簡素化された印象を受ける。しかも，全体的にヘボンの再版よりも第三版以降の表記に近いことから，早い時期からブラウンはローマ字の書き方に高い関心をもち研鑽を重ねてきたに違いあるまい。ヘボンローマ字を誕生させた影の功労者としての存在は大きい。

外国人による外国人のための語学書で，明治初期にすでに刊行され多くの人に読まれたものに，アーネスト・サトウ(Ernest Satow)著の〝Kuaiwa Hen. Twenty five Exercises in the Yedo Colloquial, for the use of Students.〟(『会話篇』，1873)がある。サトウはイギリスの外交官で，1862年に英国公使館通訳として来日し，明治28年に日本公使となった後も日本語・日本研究の発展に大きく貢献した。特に，上述した『会話篇』は明治初期の著作にもかかわらず，会話の内容と組み立て方，ローマ字表記とともに，きわめて新鮮で現代的な感覚がもたれる。山本正秀（1965）は，文体史の変遷の中でサトウの同著を取り上げ，「こなれた言葉遣い」と評している。ローマ字を見ても，〝irassharu〟，〝dochira〟，〝arimasho〟，〝yoroshiu gozaimasu〟，〝Daibutsu〟など，拗音の一部を除いてはかなり後になってから見られた(ヘボンの第三版のように)綴りに近い。また，促音は〝itatte〟とか〝irassharu〟のように子音を重ねて表わされるが，時に〝at'taka〟のようにtaの前で音を溜める発音の仕方が分かりやすい表記も見られる。全体としては，無駄を省いた読みやすいローマ字であり，こなれた会話文とよく釣り合っている。

3.5 ローマ字国字論への動き

キリスト教伝来に始まり，国内外の外国人による日本研究が日本の近代化の礎となったのは紛れもない事実である。また，新井白石，大槻玄澤等，蘭学者達の西洋化思想や洋文字に対する情熱も，大きな改革運動を引き起こすには至らなかったが，その後の歴史の流れを確実に変えていった。そして，ペリーの来航から開国，文明開化を迎えたわけだが，この幕末から明治維新にかけての開国の動きは国字問題にも西洋化の影響を及ぼすことになる。

まず，国語の表記法で漢字を廃止する，あるいは文字を改良するといった提言を行なったのが，前島密（ひそか）（1835～1919）であった。彼は，慶応二年（1866年），「西洋諸国のように音符字（仮名）を用いて教育し，いずれは日常公私の文に漢字を御廃止すべし……」（＊）といった内容の，いわゆる「漢字御廃止之議」を将軍慶喜に建白した。（＊原文は漢字で，『国字問題論集』（昭和25年，吉田，井ノ口編）に全文が収録されている）前島密は，医学と蘭学を修めた後長崎にて英語を教えた経歴をもち，外国人宣教師等との交流もあった人物として知られる。明治維新後は政府の役人となり，後に郵便制度創業に参画し，「切手」「郵便」「葉書」などの用語を創るなど，文字改革論者として歴史に名を留めている。

前島に続き，明治2年と4年には漢学者南部義籌（よしかず）がローマ字採用に関する建白書を提出し，翌5年には「文字ヲ改換スルノ議」を文部省に建白。その中に，「我が国の人情を察すれば，多くの人は西洋文明に心酔し西洋に似ることを文明と考える。この人情に応じ，不便な漢字を至便な洋字に換えて我が固有の言語を修めると学びやすい……」とあり，西洋化策の一つとして，文字の改良（改換）を訴えた。文字の簡易化を叫ぶ人はまだ続いた。明治6年，福澤諭吉は『文字之教』の中で，「日本語に仮名がありながら，漢字を交えて用いるのは不都合なことだ。不都合と言っても，日常生活で漢字が用いられているのでこれを全く廃止するわけにはいかない。（中略）しかし，千ぐらいあれば一通りの用便には差し支えないだろう。」と，漢字を制限する意見を提出した。明治7年には，西周が明六雑誌に「洋字

ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」を発表した。この中で，西周は「天性の言語ヲ廃シ他の言語ヲ用インと欲ス」のではなく，洋字（ローマ字）で国語を書き表わすことの利を十項目，害を三項目挙げながら，ローマ字推進論を展開している。利としては，語学に役立つこと，言文一致すること，26文字と綴り方を覚えれば子供も女性も「書」を読むことができること，翻訳・著述・印刷に便利であること，また，ローマ字採用の弊害として，筆店が不要になること，和紙から洋紙への切り替え等の問題を挙げている。

明治9年に文部省の「ローマ字音図」が発表されるが，菊地季生（1931）によると，「綴りは日本式で，作成にあたり，南部氏(義籌)の力が大きかったようだ」ということである。明治9年から15年までは外国人の研究者もローマ字論争に加わっていくが，その口火を切ったのが11年のErnest Satowの「シ，ジ，ズ，チ，ヂ，ツ，ヅ」論争であった（発音に従う)。その後，Edkinsが「チ，ツ」は　ti，tuという仮名に合わせた綴りを主張し，再度Satowの反駁を受けている。明治15年，矢田部良吉は東洋学芸雑誌に「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説」を発表，ローマ字の実用化を説き，具体的な実施案を提言している――「……羅馬字ノ便ナルヲ確知シ，之ヲ実用ニ用フルニ規則ヲ設ケル。此規則ハ簡易ヲ主トシ繁雑ヲ省キ，仮名ノ用法ニ拘泥セズ，勉テ音声ヲ以テ標準ト為ス可シ，(―中略―)羅馬字ヲ用フルノ緊急タルヲ文部省ニ建議シ，全国小学校ニ於テ其用法ヲ三四月間生徒ニ教授スルノ制ヲ設ケンコトヲ乞フベシ」(原文のまま)とあり，仮名の用法に拘泥せず，音声にローマ字綴りを合わせること，東京語を標準語とすべきだとし，すぐに小学校で実践するよう主張している。また，論文の最後の方にローマ字文を掲げ，簡便であることを強調した。さらに，在留外国人がその当時すでにローマ字を用いて日本の昔話等を翻訳していることを取り上げ，外国人を礼賛しているのが印象的である。こうしてローマ字採用論者達は，かなの会(「いろはくあい」，「いろはぶんかい」，「かなのとも」)を組織し，明治17年には外山正一の「羅馬字ヲ主張スル者ニ告グ」(「東洋学芸雑誌」34号）の提唱により団結してローマ字の会を結成する動きに入っていった。そして，明治18年1月に「羅馬字会」が創立されるのであ

る。創立時の運営委員は外山正一，矢田部良吉ほか13名，書方取調委員40名が関わる大きな事業となった。同年6月に出版された矢田部良吉の『羅馬字早学び』には，第1章から13章にわたるローマ字綴りの規則が細かく，しかも具体的に示され，「ヘボン」式ローマ字を基礎にした国字としてのローマ字体系がここに初めて完成を見ることになる。以下，いくつかの例を挙げたい ── ＊発音と仮名遣いの異なるもの：iwa, kawa, tatoe, kaeru ……（イハ，カハ，タトヘ，カヘル，……）/mochiyu，bayai，kuwayu，aoi（モチフ，バアヒ，クハフ，アフヒ）＊長音，拗音の中で注意すべきもの：hyô（ヒョウ氷，ヒヤウ兵，ヘウ表），kyû（キュウ求，キウ求，キフ給），pô（ホンパウ本邦，ネンポウ年俸，セッパフ説法），tô（タウ，トウ，タフ，トフ，とほめ）＊クア，グアの綴りはka，gaとする（しかし，kwa,gwaも地方により認められるべき）＊独立語は別々に書く（hito,shokumotsu, sumau）但し，〝gen-in〟，〝kan-yu〟，〝ten-yu〟などと，〝n〟に母音や半母音が続く場合はハイフンを入れる。＊その他，yukite，yukanu，yukimasu ……/yuku－bekarazu, yuki－kerashiとする。＊最後に物語や論文のローマ字書きを参考として載せている。）

こうして，過去200年以上も前から外国人によって記されてきたローマ字綴りが日本人の手によって漸くその全体系が明確に示されたわけである。残念ながら，この発足当時の「羅馬字会」原案起草委員にヘボンは入っていない（後に加わる）が，英語学派と言われる委員の多くがヘボン式を支持していたとされる上，イギリス人の研究者チェンバレンとイービーが委員に加わっていたことから，「発音に合わせたローマ字綴り」が守られたようである。したがって，「羅馬字会」式と「ヘボン」式ローマ字は大きな部分で違いがなかった。日本の近代化に至ってローマ字史も一区切りついたかのように思えたが，後にこの「ヘボン＝羅馬字会」式に反対する田中館愛橘らのグループが「日本式ローマ字」の採用を訴え，ローマ字運動はまた別の意味で激化し，混沌としていく。

4　おわりに

明治時代にあれほど激しかったローマ字論争は，一体，今どこへ消えてしまったか。昭和30年～35年当時を思い出せば，ローマ字の基本的綴りを学校で学んだ記憶がある。自分が日本語教師でなかったら，こんなにローマ字を書く機会はなかっただろうが，書いてみて，正書法の難しさを改めて感じる。ローマ字は言うまでもなく音声を写す文字であるからこそ，日本人には不得手であったのかもしれない。外国語と比較すると，自国の言語の音声，文法，語彙の体系がよく見えてくるものである。日本語をローマ字で表そうとするだけで，文の成分の捉え方がより厳密になる。独立した語は離すのか，複合語は分けるのか，接辞はハイフンでつなぐのか，等を考える。語彙についても，意味の伝えやすい綴りを工夫するようになる。音声はもっとも重要である。ローマ字は音声文字であるから，日本語の音声を客観的に分析できないと正確に書写できない。しかも，外国の文字を以て日本語を写すのであるから簡単なことではない。両方の言語間で完全に一致する音と近似音しか存在しない場合もあるからだ。例えば，現在のローマ字表記でハ行はha，hi，fu，he，hoとフだけをfuで表わすことが多い。しかし，厳密に言えば，ハ，へ，ホは声門音(と言っても英語の[h]とは違うが)，ヒは硬口蓋音，フは両唇音と，調音点が違うので書き分けるという考えも生まれる。ダ行，ザ行の表記は過去300年にわたって研究や議論の対象になっているが，音声が同じとしてji，zu（ジ，ヂ/ズ，ヅ）に落ち着いている。それでも，時間（jikan）と火事（kaji）のjiの発音の違いが指摘されても，綴りの書き分けは全く問題にされていない。いずれにしても，ローマ字を綴ることで日本語の特徴がもっとも浮き彫りにされる。その意味で，ローマ字をもたらしてくれた先人達の偉業に改めて敬意を表したいと思う。ロドリゲスのローマ字綴りとその用法の記述は，もっとも感動を与えてくれた。ラテン語，ポルトカル，イタリア語といった系列の言語の音声の類似性もあってか，また彼の卓越した言語感覚とですでにほぼ完全な日本語音声の特徴を把握できていたようである。フランスのロー

ニー，イギリスのディキンズ，チェンバレン，サトウ（後の二人は次稿で詳しく扱う予定）等の東洋学者と呼ばれる人々は，難解な日本語の古典を翻訳し，ローマ字と英語で著し多くの西洋人に日本を知らせてくれた。そして，ヘボンを始め，リギンス，ウイリアムス，ブラウンほか多くのアメリカ系宣教師達は，外国人の目で日本語を分析し，辞書や語学書を完成させた。明治以降もローマ字論争は続いていくが，外国人の築いた土壌に種がまかれていったと考えてよいだろう。地球化時代となった現在，ローマ字の使用もさらに拡大し，我々の生活に根付いたものになっている。先人達の御苦労に感謝し，未来永劫にローマ字が消滅せぬことを願いつつ，本稿を締めくくらせていただく。

主要参考文献一覧　（明治期以前の文献，辞書は大学付属図書館ほか，千葉宣一教授に，その多くをお借りした。ヘボン辞書（4版）は菅原勝伴教授の蔵書を使わせていただいた。）

- 『日葡辞書』（邦訳―長崎版），土井忠生ほか編，岩波書店，1980年
- 『羅葡日対訳辞典』，島正三訳，文化書房，昭和37年
- 『拉葡日対訳辞典について』，岩井大慧，東洋文庫，昭和26年
- 『切支丹語学の研究』，土井忠生，靖文社，昭和17年
- 「ロ氏小文典のローマ字綴り」，土井忠生，『橋本進吉国語論集』所収，岩波書店，昭和19年
- English-Japanese,Japanese-English Vocabulary, W. H. Medhurst, Batavia, 1830
- Dictionnaire Français-Anglais-Japonais, Leon Pages, Paris, 1866
- Anthologie Japonaise, Leon De Rosny, Paris, 1871
- Textes Japonais, Leon De Rosny, Paris, 1863
- Japanese Odes- "Hyak Nin Is'shiu" , F. V. Dickins, London, 1866
- Japansche Spraakleer, J. J. Hoffmann, Leyden, 1867
- Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese, S. R. Brown, Shanghai, 1863
- Mastery System adapted to the study, Japanese or English, S. R. Brown, Yokohama, 1884
- 『和英語林集成』初版，三版，四版，J. C. Hepburn，1867，1886，1888

・『近代文学研究叢書』12（ヘボン，リギンス，ウイリアムスほか），昭和女子大学，昭和34年
・『ヘボンの生涯と日本語』，望月洋子，新潮社，昭和62年（1987年）
・『西洋紀聞』，新井白石，宮崎道生校注，東洋文庫，昭和43年
・『磐水存響』（大槻玄澤遺稿集），大槻茂雄編，大正元年
・『日本英語学書誌』，荒木伊兵衛，創元社，昭和6年
・『日本英学誌の研究』，豊田實，千城書房，昭和38年
・『国字問題論集』，吉田澄夫・井ノ口有一，昭和25年版
・『明治文化全集』12，18（文学芸術/雑誌），吉野作造編，日本評論社，昭和3年
・『国字問題の研究』，菊澤季生，岩波書店，昭和6年
・『日本ローマ字史年表』，菊澤季生，日本のローマ字社，昭和34年
・『国語国字教育資料総覧』，国語教育研究会編，昭和44年
・『近代文体発生の史的研究』，山本正秀，岩波書店，昭和40年
・『標準ローマ字綴り方解説』，日下重太郎，ローマ字ひろめ会，昭和3年
・『ROMAJI TEBIKI』，藤岡勝二，ローマ字ひろめ会，大正元年（明治39年初版）
・『ローマ字の調査』，岡倉由三郎，帝国ローマ字クラブ，昭和8年
・「日本語羅馬字化の問題」，H. Palmer（宮田斎訳），『国語羅馬字化の原理』所収，岩波書店，昭和8年
・『ローマ字正字法の研究』，松浦四郎，ローマ字教育会，昭和27年
・『西洋人の日本語発見』，杉本つとむ，創拓社，1989年

Summary

Roma-ji and Japanese modernization
—— The influence of Western scholars

Kazuko Nakagawa

Roma-ji letters are now part of the Japanese writing system, together with Kanji and Kana. And one of the most well-known methods of romanization is called "Hepburn-shiki", or the Hepburn style.

Dr. J. C. Hepburn was a Christian missionary as well as a highly qualified medical doctor and a literary scholar who came to Japan in 1859, at the end of the Edo Era. He devised and established the method of romanization during the Meiji Era, which led to a revolution of the whole Japanese writing system. He dedicated himself to Japanese modernization; he taught Japanese people English and Western culture, and published a dictionary of English and Japanese for both foreigners and Japanese. In his dictionary, words were transliterated in Roma-ji alongside their original Kanji and Kana forms, so that anybody could read them without too much difficulty. Consequently Roma-ji came to be regarded as an easy tool for writing both spoken and written Japanese.

But Hepburn was not the only person to invent a Roma-ji writing system. In the mid-16th Century, Roma-ji was used in Japan to read Chinese-written literature. The inventors were also foreign missionaries from Spain and Portugal. They printed quite a few books and dictionaries in their original Roma-ji, in which the Japanese language system and people's lives were described.

During Japan's subsequent period of isolation, all foreigners except the Dutch were deported from Japan, and few works of transliteration were accomplished before the 19th Century. Then, in the 19th Century, European Japanologists such as Pages, Titsingh, Rosny and Dickins published books and dictionaries on Japan, with their original roman-

ized transliteration of Chinese and Japanese Characters. These foreign missionaries and scholars took the lead in developing people's ability to read Japanese and Chinese writings and classic literature through Roma-ji.

In this article, I have tried to study the methods of transliteration into Roma-ji developed by these inventors and to establish the specific features of their romanization. It can be said that the invention of Roma-ji by these early foreigner scholars as well as the work of Hepburn contributed greatly to Japanese modernization.